

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

外大の思い出

著者	北畠 霞
雑誌名	神戸外大論叢
巻	49
号	5
ページ	109-113
発行年	1998-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001524/

外大の思い出

北 畠 霞

この雑誌のどこかのページにある略歴から分かるように、私にとって神戸市外国語大学は三つ目の職場でした。28年間の毎日新聞社での仕事のあと、ニューズウィーク日本版を手がけるためにTBSブリタニカという出版社に移り3年間でそこで過ごしました。しかし実はこの2社では定年まで在職したわけではありません。毎日新聞社では「繰り上げ定年退職」ということにはなっていますが、定年の55歳（今は60歳）前に辞めても定年扱いになるという制度を利用したわけです。二つ目の会社では定年とは全く関係なく辞めました。というわけで神戸外大が、定年の年齢までいっぱい勤めて退職した唯一の職場ということになります。

この経歴が示すように、アカデミズムとは全く無縁の世界で仕事をしていました。にもかかわらず11年前（1987年）春にこのキャンパスに来たとき、神戸外大は外部の私を仲間の一人として温かく迎えてくれました。それほど長期間勤めたわけではない私に名誉教授の称号を与えていただいただけでも大いに感激しているのに、今回こうして私のために外大論叢の記念号まで編集して頂けるのは、本当に身に余る光栄だと心から感謝しています。

#

#

新聞社の中でも私は外国通信畑に長く、東南アジアと米国を中心に特派員の仕事もしてきました。国際的なニュースを日本の読者に送り続けているうちに、二つの疑問が少しずつ形をとるようになってきていました。一つは外国のニュースを日本人である私が日本人向けに加工し提供してそれでいいの

だろうか、日本人でない視点を提供すべきではないだろうか、ということですが。これはニューズウィーク日本版を手がけることで自分なりの疑問に答えられたと思っています。

もう一つは、新聞の記事というのは不特定多数の読者に向けたもので、自分のものの考え方に対する反応というのは分かりにくいところがあります。たまに読者からの投書で手がかりがつかめる程度なので、自分の考えを少し違った視点から直接誰かに、できれば若い人に伝えたい、という気持ちが募っていたことです。新聞社には比較的多くの先輩が、在職中も、また退職した後も大学で教鞭を取っていることをみていたので、それにあこがれていたということもあるのかもしれません。

そういう転機に立っていたころ、神戸外大に国際関係学科が新設され国際問題に関係あることを取り上げられる英語の教員を募集していることを知りました。1も2もなく、これに応募したのは言うまでもありません。この時、精神医学者でジャーナリスティックな仕事をされている野田正彰先生、経済企画庁の審議官を勤められた坂本正和先生、それに同業で読売新聞社出身の浅井信雄先生が同じときに外大に奉職することになりました。この4人は今年3月までにすべて外大を去りましたが、当時の新聞は「民間から4人の教授」というような見出しで報じ、かなり話題を呼んだものでした。

#

#

外大での仕事が決まったとき、一つだけこれは注意しないといけないと心に決めていたことがあります。私は大学では法学部に属し、法律と政治を勉強したことになります。大学で教わったことはすべて忘れてしまっていますが、刑法か刑事訴訟法の先生がおっしゃったある一言だけははっきり覚えていることがあります。「知ることは許すことだ」という法律の格言のようなものです。被疑者や被告のことを知れば知るほど、その人物が犯した罪は許してしまいたい気持ちになる、という意味だったと思います。

実際、新聞社に入ってしまったら社会部で警察回りをして犯罪の記事を書い

ていると、本当にこの格言が言う通りだ、と感ずることがよくありました。1950年代後半、昭和30年代は貧しさゆえ、家庭の事情ゆえの犯罪が多かったからです。そのような記事を、この格言を思い出しながら書いたものでした。

自分が学生諸君に話をする立場になると、これはこわいことです。授業は分かりやすく、学生が興味を持ってくれるように進めねばならないが、自分が話したことのどの部分をその後も長く覚えてくれるか分からないから、口をすべらすわけにはいかないと自戒したものでした。

これは授業中に話したことではないのですが、私が教えたある男女の学生が結婚した時、結婚というのは信頼関係が重要な要素だから、それがなくなったらさっさと離婚するのも解決法の一つだと言ったらしいのです。そのためだけではないでしょうが、この二人は最近急に関係が悪化して、さっさと離婚してしまいました。後で私がそんなことを言ったのだと聞かされ、やはり口は災いのもと、授業中の失言でなくてよかったと思ったものです。

しかしいいことを覚えてくれている卒業生もいます。ある夕、外大での授業を終えて地下鉄に乗ると、隣に座っていた赤ん坊連れの若いお母さんが「北畠先生ですね」といって話しかけてくれました。彼女は、私が外大に来た年に受け持った英米学科の卒業生でした。「先生の講義は新聞や雑誌の記事を使って、とても新鮮でした。新聞の記事では結論が最初にくるといわれたのを今でも覚えています」と言ってくれました。教師冥利に尽きるとはこのことだとうれしく思ったものです。

#

#

しかし外の世界から来て、いくつかのカルチャーショックがあったのも事実です。最初に外大論叢に寄稿したのは外大に来た次の年だったと記憶しています。たしか10月末が締め切りだったのではないのでしょうか。原稿の締め切りから1週間も遅れてしまい、「私が最後でしょうね」と言っておそろおそろ係に差し出すと、「いや、最初です」と言われてびっくり。以後、1ヵ月ぐらいは平気で遅れるようになってしまい、編集責任の方にはたいへんご

迷惑をおかけしたのではないかとと思っています。ちなみに今回この原稿はなんとか締め切りに間に合わせました。

締め切り期限の感覚の違いよりも強い印象をうけたのは教授会のあり方です。外大に来てまもなくの教授会で、ある困難な問題をめぐって議論が延々、午後11時近くにまで及ぶということがありました。この間だれひとり退出者はなく、全員が真剣に討議に参加し最終結論を得たのでした。こんなに夜遅くなるというのはこのときだけでしたが、普段の教授会においても、この大学のことは自分たちで決めるのだという意気込みがひしひしと感じられたものです。その民主的な運営は、上意下達の社会に身を置いていた者には極めて新鮮に映ったものでした。教授会ははじめもろもろの学内の会議にできるだけ顔を出すようになったのも、外大に来て知った自治、自主の精神に強い衝撃を受けたからにほかなりません。外の世界を知るとというのは本当に重要なことだと実感しています。

#

#

こうして私は外大で仕事することができたことに大きな満足感を覚えています。おそらく私のこれまでの一生のなかで、これほど充実した時期が続いたことはあまりなかったことです。しかし同時にいくつかできなかったこともあります。その一つは国際関係論、あるいは国際関係学とは何か、ということをもっと徹底的に国際関係学科内で議論できなかったことです。

なぜこのようなことを言うかという、毎年の国際関係学科での授業を始めるとき、学生諸君にアンケートでいくつかの質問をしてきました。この大学で勉強した後、諸君は将来のことをどう考えているか、というのもその一つです。その答えの傾向をみると、この4、5年の間に際立った特徴が見られるようになっていきます。それは外交官になりたい、国連で仕事をしたい、国際協力場で活躍したい、平和維持活動に携わりたい、という希望を書く学生の数が年々増えていることです。希望というよりは夢といったほうがいいのかもしれませんが、昨年外交官試験の1次試験の難関に一人の学生が通

たという事実は、単なる学生たちの夢だと片づけられないような気がします。
こうした希望は最初の頃には全く見られないことだったのです。

もちろんこの人たちは少数派ではありますが、これから国際関係学科が目
指すべき一つの方向を示唆しているように思えてなりません。国際関係につ
いて話しながら、こうした学生諸君の期待に応えられるような議論ができな
かったのを残念に思っている次第です。

これから大学が直面する問題は多岐にわたることでしょうが、国際関係学
科、そしてそれだけでなく、全学の皆さんの一層のご活躍を祈って筆を置き
たいと思います。ありがとうございました。

(1998年9月記)